

仏教法話

—心のひかり・人生のしるべ—

平和の祈り



平和の祈り

二〇二二年二月二十四日に、ロシアによるウクライナ侵略（戦争）が始まりました。家々が破壊され、幼子を含む無辜の市民が殺され、一千万人以上の難民が国の内外に脱出していきます。平和で幸せな暮らしが一瞬のうちに破られ、家族を殺されて泣き、悲しむ人々が報道されています。ブチャやイジュームなどロシアが占領したあとには、拷問部屋や、拷問の痕跡を残した遺体や、大勢の人々の埋葬のあとが残っています。それらを見て、本当に心が痛みます。

戦争はあらゆる戦術を総動員して相手を徹底的に困らせ不幸にすることと思いました。ミサイルや大砲や火器を使った破壊や殺戮、

経済封鎖やサイバー戦争はもちろん、捕虜や市民の強制連行や、黒海の封鎖や、核使用の威嚇など、ありとあらゆることを総動員して相手を困らせ自国を有利にしようとしていきます。戦争とは人権を無視し、壊し、それらを利用して自国の有利を得ようとするものであり、改めて認識させられました。

お釈迦さまの時代のプーラナ・カッサパの言葉です

「プーラナ・カッサパは次のようにいった。『いかなることを』しても、またなごしめようとも、（生きもののおよび人間を）切断しても、また切断せしめようとも、（生きもののおよび人間を苦しめようとも、また苦しめさせようとも、（生きもののおよび人間を）悲しませようとも、また悩ませようとも、（生きもののおよび人

間を)おののかせようとも、またおののくようにさせようとも、命を害しようとも、盗みをなそうとも、他人の家に侵入しようとも、掠奪をなそうとも、追剥になろうとも、他人の妻と通じようとも、虚言を語ろうとも、このようなことをしても、悪を行ったことにはならない。たとい剃刀のような刃のある武器を持つてこの地上の生きものすべてを一つの肉団・一つの肉塊になそうとも、これによって悪の生ずることもなく、また悪の報いのくることがもない。(後略)』と。(中村元著 釈尊の生涯 (平凡社))

戦争とはこういうものなのでしょう。

お釈迦さまがお生まれになったシャカ族の国は小国でお釈迦さまの在世中にコーサラ国に滅ぼされてしまうのです。お釈迦さまは王

として迫りくる他国の武力を撃退して大帝国の主となるか、または現世的な事柄をすべて断念して精神的な師となるか、いずれかを選ばなければならなかったのです。お釈迦さまはカツサパのような退廃的・破壊的な思想に与^{くみ}することなく善を求め、道を求めました。

お釈迦さまが道を求められ私たちに遺してくれた教えをひとことと言うとどんなことでしょうか。

それは「おもいやりの心」です。おもいやりの心は家庭を幸福にし、社会を明るくし、世界を平和にするのであります。自分のことはさておいても他人のことを思いやる心、これを菩提心と申します。

私達人間は生存競争の中に生きています。それは弱肉強食の自然法則であって、動物はお互いに食いつ食われつして生きております。

そして人間もまた弱者は滅び強者が栄えるのが当然のことと、企業も、政治も、更に民族も、国家も、力の政策により、勝負の世界に生きております。

お釈迦様はそのような現実の中で、元氣な若者もやがて老人となり、昨日の勝者が今日は敗者となり、栄えたものもやがて滅びゆく弱肉強食の自然よりもっと大きなほんとうの自然を悟られたのであります。それは争う世界ではなく、おもいやりあう世界であります。太陽は限りない思うやりの光りと熱とで地球の万物を育んでいます。親心は子どものために惜しみなく愛情をそそいでいます。花が蜜を与えれば、蝶が花粉を運び、小鳥が赤い実を貰えば種を運んであげるように、大自然の本当の法則は、もつと大きなおもいやりの世界であることを悟られ、それを人間の道

に取り入れ、弱肉強食だけの争いと憎しみに悩み、はかない悲しみに暮れる人間を、おもいやりの心で助けあい、愛しあい、信じあい、敬いあう、やすらぎの世界に行きなさいと諭されたのであります。そしてそれこそが永遠に滅びない聖い極楽の世界であり、それこそが平和の法則であり、それこそが人類の救いであることを説き示され、「一切の衆生は皆これ吾が子なり」と宣言されたのであります。

おもいやりの心こそは、人間の尊さであり、それこそが世界を平和に導く尊いみ仏さまの心であります。人間が人間であるための「おもいやりの心」に目覚めて、世界に平和が訪れるように祈りましょう。